

## 私のおじいちゃん

赤澤 渚紗  
あかざわ なぎさ

私のおじいちゃんは、すごくやさしい人。おじいちゃんは、少しはなれた所に1人住んでいる。私が3才の時、石井に引っこして来てからずっと近くで、私を、見守っている。私の言う事を何でも聞いてくれて、前山公園にも一緒に何度もつれて行ってくれて一日つきあつて遊んでくれた。

小学校になつても毎日、毎日、暑い日も、雨の日も学校まで送りむかえをしてれていた。

「熱中しようにならないか心配やからむかえにこんでいいよ。」と言つたら「じいちゃんは、自分の運動のために、行つてるから心配いらん。」と言つてくれる。私が気にしないように言つてくれるのが伝わりうれしかった。

2年前に一緒にくらしていたおばあちゃんが病気になる天国にいつてしまった。おばあちゃんがいなくなった事も悲しかったけど1人ぼっちになつてしまったおじいちゃんの事がすごく、すごく、心配だった。おそう式の後、初めて手紙をもつた。「ばあちゃんがいなくなつてしまつたけどじいちゃんと元氣にくらしていこうな。」と書いていた。字を書くのが苦手と言つたので手紙をくれて、とてもうれしかった。今まで

料理も全くした事なかつたのにカレーや肉じゃがなど色々な料理ができるようになって、私が味見をして「おいしいな。」と言うと、「今回は、うまくいけておいしいんよ。」と言いながらすごくうれしそうにわらう。時にしつばいするけど、食べてみたらすごくおいしくて、びっくりする。「じいちゃんは、すごいだろ。」と言つてくる。私は、本当におじいちゃんは、すごい人だと思った。今年のばあちゃんの命日に私は、もしこの手紙を読んだら私の家のポストに入れてください。と書いてぶつだんにおいた。数日がたつてポストに天国のばあちゃんからお手紙が入つておどろいた。手紙には、家族とみんな、天国でなか良くくらしています。空の上からいつも見守つているよと、書かれていた。てつきり、おじいちゃんが書いたと思い、電話で聞くと「じいちゃんそんな知らんよ。」と言ひ、ママに、聞いても「じいちゃんは、そんな手紙書く人じゃないよ。」と言つたから、おばあちゃんからと思うようにしたけどでも、おじいちゃんのやさしさが伝わつてきて、とてもうれしかった。いつもは、はずかしくて言えないけど、「おじいちゃん手紙ありがとう。」と大きな声で言ひたい。